ロシア語のいわゆる連結動詞現在形の特殊性について

匹田　剛

0．はじめに

現代ロシア語にはいわゆる連結動詞（copulative verb）として *быть* という語があるが，この動詞はその特殊性故に通時的・共時的に様々な問題をロシア語学に投げかけている。その中でも現在形は以下で示すように，その他の形態にくらべてその特殊性がとりわけ際だっていると言えよう。本稿の目的は，ロシア語の連結動詞 *быть* の現在形が示す奇妙な性質を形態論と統語論の両面から，通時的・共時的に概観し，それに対して考察を加えることにある。

1．形態的特殊性

本節では，*быть* の形態法を概観する。そしてその体系の中で現在形だけが他とは異なる特殊な性質を多く示しており，そのため *быть* の形態的体系全体が他の動詞とくらべて異常なものになってしまっていること，さらにその体系の異常さを解消するために現在形が *быть* のパラダイムからはじき出されているという言語変化が起こっていることを論じる。

1.1. *быть* のパラダイム

まず，*быть* のパラダイムを見てみよう。ロシア語の連結動詞 *быть* は以下のような語形変化を行う[1]。

(1)

(a)　不定形：быть

(b) 現在形：ϕ/есть

(c) 過去形：

男　性	女　性	中　性	複　数
был	была	было	были

(d) 未来形：

	単　数	複　数
1人称	буду	будем
2人称	будешь	будете
3人称	будет	будут

(e) 形動詞現在：будущий

(f) 形動詞過去：бывший

(g) 副動詞：будучи

(h) 命令形：будь（単数），будьте（複数）

これら *быть* の形態変化を見ると，現在形がいくつかの他と異なる特殊な性質を持っていることがわかる。以下各節では *быть* の現在形が持つ形態的特殊性を概観し，考察する。

1.2. ϕ と変化の消失

ここでまず着目するべきこととして，現在形が通常 ϕ で現れると言うことがある。

(2) Он　　ϕ　　студент.
he-nom.　be-pr.　student-nom.

「彼は学生である。」

ロシア語では先行する文脈ですでに言及されている要素を省略して顕在的に

[1] ここでは形態法の形式的な面のみを問題とするので，接続法，一人称命令法など，その他の形態と同じ形を示すものは除外した。また，形動詞は形容詞の形態法に従い一致を行うが，それはここでは問題としないので具体的に示さないこととする。

表現しないと言うことが非常にしばしば起こるが，ここでの ϕ はそのような先行する文脈における言及がなくてもまったく問題なく可能なものである。従って，省略という可能性は認められない。

また，要求される文体などの一定の状況において現在形は *есть* という形で顕在化することもあるが，その場合でも他の動詞と異なり人称，数などで主語との一致により変化をすることはない[2]。

(3) Человек есть тайна.
man-nom. be-pr. mystery-nom.

「人間とは謎だ。」

(4) Кто ты есть?
who-nom. you-nom. be-pr.

「君は何者だ。」

それに対して，ロシア語のその他の動詞の現在時制は先行文脈における言及によって省略できない限り顕在的にあらわれ，かつ以下のように3つの人称と2つの数によって6通りに変化する。

(5) читать 「読む」

	単 数	複 数
1人称	читатю	читаем
2人称	читаешь	читаете
3人称	читает	читают

(6) говорить 「話す」

	単 数	複 数
1人称	говорю	говорим
2人称	говоришь	говорите
3人称	говорит	говорят

[2] 3人称単数形として *суть* という形があるとされる場合もあるが，これは事実上現代ロシア語で用いることはないと言って良い。

通常の屈折通りなら(3)では3人称単数形が，(4)では2人称単数形が要求されるところであるが，いずれの場合も *быть* は同じ形を示しており，一切変化しない。このことは *быть* のパラダイム内部のみならず，動詞の屈折が豊かなロシア語という言語の形態法全体から見て極めて奇妙な現象と言うことができる。

このように，現代ロシア語では *быть* は現在時制で ϕ になるか，あるいは顕在的にあらわれるとしても一切変化を行わないが，かつてのロシア語ではそうではなかった。Иванов (1983) によると，現代ロシア語の *быть* にあたる古ロシア語の *быти* は現在時制において以下のように変化する[3]。

(7)

	単　数	複　数
1人称	есмь	есмъ
2人称	еси	есте
3人称	есть	соуть

Иванов (1983) によれば，口語ではすでに12世紀から現代語のような ϕ が見られるようになっており，現代に近づくほどこれらの顕在的な現在形は文語的色合いを強めているという。また，Ковалевская (1992) では，19世紀の前半にはこの ϕ が標準化したとされている。さらに，佐々木 (1982) には，イワン雷帝が A. Курбский に与えた書簡で，以下のようにいくつかの形が併存していることを指摘している。

(8) 1人称単数：есмь，есми

1人称複数：есмы，есми，есмя

[3] 古ロシア語においては数のカテゴリーとして双数が存在していたが，現代ロシア語ではこれは消失している。これはロシア語全体の問題なのでここでは問題としない。この表もオリジナルでは双数が含まれていたが，ここでは無関係なものとして削除した。なお，現代語の *есть* はかつての3人称単数形にその起源を持つ。

2人称複数：есте，естя

また佐々木（1982）は ϕ の使用や3人称単数の *есть* の他の人称・数への転用も認められることも報告している。

これらの文献が示す情報は *быть* の現在形がその屈折や，顕在的な形式を失っていくプロセスを示していると考えられようが，いずれにせよ *быть* の形態法の体系において現在形だけがその全ての屈折や顕在的形式を失い，特殊化したことは明らかである。本稿では，これは *быть* の体系が現在形をめぐって示す特殊性によって引き起こされた変化であり，現在形が体系からはじき出されつつあることを示すのではないかと考える。以下の各節ではこの点を考えていく。

1.3. 語幹

現在形が示す特殊な性質の第2点目は現在形の ϕ/*есть* のみ語幹が他とは全く異なるいわゆる補充法になっているということである。すなわち，その他の形式は全て語幹が *бы-* か *буд-* になっているにも関わらず，現在形だけは ϕ かあるいは *есть* というまったく異なる語幹からなる形式を用いている。

通常のロシア語の動詞は不定語幹，過去語幹そして現在語幹の3つからなるが，圧倒的多数の動詞では不定語幹と過去語幹が一致している[4]。そして，不定語幹からは不定形，過去形，能動形動詞過去が形成され，現在語幹からは現在形，能動形動詞現在，命令形，そして副動詞が形成される[5]。

---

[4] 従って，以下では両者を併せて不定語幹と呼ぶ。

[5] ただし，副動詞が現在語幹から形成されるのは原則不完了体動詞のみであり，完了体動詞の場合は基本的に不定語幹から形成される。また他動詞の場合，この他に被動形動詞現在が現在語幹から，被動形動詞過去が不定語幹から形成される。ここでは不完了体で自動詞である *быть* と比較することが目的なので，関係のないこれらの形の問題には触れない。

(9) 「生きる，暮らす」(不完了体)[6]

不定語幹	現在語幹
不定形：жить 過去形：жил 能動形動詞過去：живший	現在形：живут 能動形動詞現在：живущий 命令形：живи 副動詞：живя

それに対して *быть* の場合，語幹は3種類ある。

(10)

不定語幹	現在語幹	ϕ/ес−
不定形：быть 過去形：был 能動形動詞過去：бывший	未来形：будут 能動形動詞現在：будущий 命令形：будь 副動詞：будучи	現在形：ϕ/есть

つまり，*быть* の場合，他の動詞と違い，現在形だけ *ϕ/есть* となり，他とまったく異なる語幹によって語形が形成されているわけである。

ここで仮に現在形がこの *быть* のパラダイムの外にあると考え，かつ未来形が現在形であると読み替えると，表(10)は以下のようになる。注目すべきは，この新しい表(10')であれば，語幹に関して *быть* のパラダイムは通常の動詞と全く同じで特別なものではなくなるということである。

(10')

不定語幹	現在語幹
不定形：быть 過去形：был 能動形動詞過去：бывший	現在形：будут 能動形動詞現在：будущий 命令形：будь 副動詞：будучи

ϕ/ес−
現在形：ϕ/есть

[6] 過去形は男性形，現在形は3人称複数形，命令形は単数形でそれぞれ代表させてある。また，以下も同様である。

Виноградов (1960) には，*будут* のような通常未来形と呼ばれている形式が俗語において現在の事象を示すことがあることが報告されているが，もしこの現象がより広まり標準化していけば，*ф/есть* という特殊な現在形は完全に不要なものとなる。ひょっとすると，Виноградов (1960) の報告する現象は *быть* のパラダイムが現在形 *ф/есть* をはじき出して(10')のようなものに変化していく過程で見られる現象のうちの一つなのかも知れない[7]。

1.4. 時制の 3 項対立

次に見られる *быть* が示す形態的な特殊性は，時制の問題である。*быть* をのぞく他のロシア語の動詞は全て，少なくとも形態的には，時制が過去と非過去の 2 項で対立する[8]。

(11)

	читать「読む」(不完)	прочитать「読む」(完)
過去時制	читал	прочитал
非過去時制	читают	прочитают

その一方で，上でも示したように *быть* は時制が現在，過去，未来の 3 項で対立する。

(12)

	быть
現在時制	ф/есть
過去時制	был
未来時制	будут

[7] しかし，この現象が 1960 年の時点から現代までの間にどう変化したのかは全く確認できていない。よりいっそうの調査が必要である。

[8] 不完了体の非過去時制形は主として現在の意味をあらわす。従って，多くの文法ではこれらは現在形と呼ばれている。前節で非過去時制を現在時制と呼んだのも論理を複雑にしないためにその慣例に従ったためである。また，完了体動詞はそ

これもやはり，ロシア語文法の中できわめて特殊な現象と言わなければならないだろう。

しかし，前節で触れたように，Виноградов (1960) は未来形が現在の事象をあらわすのに用いられることが俗語において存在することを指摘しているが，もしこの現象が標準化して現在形 *ф/есть* が不要になりパラダイムから完全にはじき出されれば(12)の表は以下のようになる。そしてこれは他の一般の動詞と何ら異なるものではないのである。

(12')

	быть
過去時制	был
非過去時制	будут

即ちこの点においても，現在形を体系からはじき出すことによって *быть* が持つ他の動詞と比べての特殊性は解消されることになる。

1.5. 現在形の特殊性

上で示したように，*быть* の形態法には現在形をめぐって通常の動詞のパラダイムとは異なる特殊な性質がいくつか見られた。ここで示す仮説は，*быть* の現在形が持つ異常な性質が，形式的な面でそれを *быть* のパラダイムからはじき出すという言語変化を引き起こしているのではないかということである。

つまり，*быть* は時制が3項対立するというロシア語の動詞としては異常な様相を呈しており，その3つのうち，現在形だけ全く異なる語幹を持つ。そして，現在形さえなければ，*быть* のパラダイムは時制の点でも，また語幹

のアスペクト的性質上，進行や繰り返しを表現することができない。それ故，未来を示すことに限定されてしまう。それ故，これも多くの文法書で未来形と呼ばれている。

の点でも他の動詞と同じ全くありふれたものになる。この特殊性を解消するために，現在形が動詞としてのパラダイムから押し出され，その結果として現在形だけが変化や顕在的な形式を失っていると考えるのである。

また，Виноградов (1960) をはじめとする多くの文献で，純粋な連結動詞は時制を示すという機能しか持っていないと述べられているが，もしそうだとすれば，時制の中でもっとも無標であると考えられる現在時制がパラダイムから追い出されるのも無理はないと考えるのも可能かも知れない。

さらに，Виноградов (1960) には，俗語で上記 *будут* のような未来形を用いて現在の事象を示す場合があることが報告されているが，ひょっとするとこれは現在形がパラダイムからはじき出されていることを示すもう一つのプロセスであり，これによって現在形の追い出しが完成すると考えることも可能であるかも知れない。が，これについては現在この変化がどのように推移しているのかは不明であり確認が必要であるのは言うまでもない。

この考え方，とりわけ因果関係に関わる部分はとうてい証明されたとは言い難く，推測の域を出ないのが実状である。しかし，この現在形が他と異なる性質を持つという点に関しては，以下の節で示すように，他にも多くの特殊性が指摘できる。以下各節では統語的な性質を中心に現在形の持つその他の特殊性を概観したい。

2．統語的特殊性

前節では *быть* の現在形が持つ形態的な特殊性を概観し，それが *быть* の形態法の体系の中で特別な位置を占めており，それ故に体系からはじき出されているのではないかと論じた。本節では統語的な観点からも *быть* のパラダイムの中で現在形のみが持っている特殊な性質を明らかにする。

2.1．述語の格

連結動詞 *быть* の述語名詞句はロシア語では主格と造格の 2 通りの格が可能である。

(13) Я *ф* *студент.*
I-nom. be-pr. student-nom.

「私は学生だ。」

(14) Таня была *студенткой.*
Tanja-nom. be-pa.f. student-ins.

「ターニャは学生だった。」

通常，多くの実用文法などにおいてロシア語ではこれら両方の形式が述語として可能であるとだけされており，それに加えて意味的な違いが述べられているに過ぎないが[9]，実態は少々複雑な様相を呈している。

Иванов (1983) によれば過去のロシア語，すなわち初期の古ロシア語においては述語名詞句の格は主格が特徴的であった。が，これが現代への言語変化の中で主格から造格への移行が起こったのである (Виноградов 1960，Иванов 1983，Ковалевская 1992，Comrie et al 1996)。この変化は現在でも完成したとは言い難く，それ故多くの実用文法は主格と造格の両者の形式が可能であるとして記述している。

現代ロシア語における *быть* の述語名詞句が主格と造格のどちらの形式を取るかという問題は多くの文献が言及しているが，その記述は様々であり，単一のものとはとうてい言い難い。

Иомдин (1990) は主格が認められるのは，*быть* が定形 (finite form) の場合のみであって，それ以外の不定形，形動詞，副動詞などの非定形の場合は造格のみが認められることを指摘している。

Виноградов (1960) には，不定形とともに主格が用いられることはきわめてまれで，また未来形とともに用いられることも事実上無いと考えられること

[9] Кохтев и Розенталь (1984) をはじめとする多くの文献では造格が「一時的 (временный)」な性質を示し，主格は「恒常的 (постоянный)」な性質を示すとされているが，その一方で Chvany (1975) など，この差は文体的なものに過ぎないとしているものも多くある。

が指摘されている。また接続法や命令法でももっぱら造格を用いることが事実上義務的であるとしている。

Шведова (1980) では，過去形と未来形では造格の方が一般的で文体的にも中立的であり，また不定形でも造格が一般的であるとの指摘がなされている。

Comrie (1996) は未来，接続法，命令法の場合，造格が事実上義務的であることを指摘している。

Timberlake (1993) は現在形で造格は不可能であるが，過去，未来ではそちらが通常であり，その割合は80%程度であることを述べている。

それぞれの文献には異なったニュアンスがあり，現代ロシア語における *быть* の述語名詞句の格のあり方をどのように捉えているかは一様とはとうてい言い難い状態であるが，それは現在もまだロシア語がこの点に関して変化し続けているからと考えるべきかも知れない。

これらの情報を総合すると浮かび上がってくる状況は，現代ロシア語で *быть* の述語名詞句は現在形の場合は主格になるが，それ以外の場合は，各文献によってどの程度変化しているかの捉え方に差があるものの，造格に変化している途上にあると言うことである。言い換えれば，現在形以外の場合は主格から造格の移行が起こっているが，現在形の場合のみはがんとして造格述語名詞句を拒み続けている。

また，私がインフォーマントに対して行った調査では，主格述語が認められるのはもっぱら現在形の場合のみであって，それ以外の場合は，たとえそれが実用文法などに可能な文として記載されている例文そのままであったとしても，過去形にごくわずかな主格述語が認められた場合があった以外，ほとんど全てが非文として排除された。ひょっとすると上記の文献で指摘されている以上に激しくロシア語の構造は現在では変化しているのかも知れない。

どこまでその変化が進行しているかは捉え方によって異なるものの，現在ロシア語で起こっているこの変化の目指すところは，*быть* の述語名詞句は基本的に主格から造格に取って代わられるものの，現在時制では主格を維持

するであろうと言うことであると思われる[10]。

注目すべきことは，やはりここでも *быть* の全形態の中で現在形のみが特異な性質を示しているということである。つまり，前節で *быть* の現在形は形態的にパラダイムの他の形式と異なる特殊な性質を示し，言語変化の過程で現在形がパラダイムの中からはじき出されるような状況にあるということを見たが，統語的にもやはり現在形のみが他と異なり *быть* の体系からはじき出されているかのようにみえるのである。

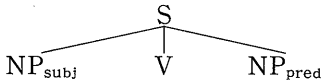
2.2. 文の構造

上で，*быть* の現在形が形態的のみならず統語的，即ち述語名詞句に与えられる格の点でも他の要素と異なる性質を示し，現在形が *быть* の体系からはじき出されているように見えることを示したが，それでは文の構造の観点から主格述語をとる場合と造格述語をとる場合には違いがあるのであろうか。

2.2.1. 格付与

Babby (1980, 1986) は *быть* の述語に主格を与えるために以下のような述語と主語が姉妹関係にあるような構造を想定している (Babby 1980：171-172)[11]。

(15)



このように述語名詞句を VP の中に置かずに，主語名詞句と述語名詞句を同

---

[10] 従って，以下本稿では変化の終着点を示すという意味でも現在形では主格述語を，それ以外では造格述語を要求するものとして論を進める。またこれは私が行ったインフォーマント調査とも矛盾するものではないと思われる。

[11] ただし，Babby (1980) はこのような構造を示す際，〝something like this〟「何かこのようなもの」という表現を用い，考えるに値するものであるとは述べているものの，断定することを避けている。

列に同じ高さに置くことによって述語の主格が主語の主格と同じ方法で付与することが可能になる。ただし，主格の付与規則も当然のことながら生成文法の一般理論で認められている方法のままでは上手く行かない。

いわゆるGB理論の枠組みに基づくChomsky（1981）やMinimalist ProgramのChomsky（1993，1995）などではいずれの理論体系であろうと，主格の付与と主語と動詞の一致を単一の操作で説明しようとしている。ところが，ロシア語には主格を与えられなければならない名詞句が，動詞が一致を行う主格主語の他に，ここで問題としている主格述語や「呼格」名詞句，引用形，左方転移要素など様々なものがあり，これでは上手く説明がつかない。また，等位接続された名詞句が主語である場合，その一致の可能性が複数あることなどもあり，いずれにせよ主格付与と一致を別個の操作と考える必要がある[12]。

それに対して，Babby(1986)では主格を以下のような規則で付与することが提案されている。

(16) A noun phrase that is not governed by a lexical category is assigned the nominative case.

また，匹田（1998）はこれをさらに改訂して以下のようなものを提案した。

(17) いかなる語彙範疇にも統率されない名詞句はINFL [-finite] に統率されない限り，主格を付与される。

これら2つの規則の違いはここでテーマとして扱っている構造とは無関係なので本稿では問題とするべきことではないが[13]，重要なのは主格主語も主格述語も，上のような構造を仮定すれば，どちらの主格付与も同一の規則で説明がなされ，ある意味主格述語は主語とよく似た構造を持っていることに

---

[12] 詳しくは匹田（1995）を参照。また，*быть* の主格述語名詞句の格付与については過去，他にも説明がなされている。それらについては匹田（1994）で論じた。

[13] 匹田（1998）の改訂は非定動詞節の主語が主格を与えられることがないことを説明するためのものである。この点はBabby（1986）では説明がつかない。

なるという点である[14]。この述語名詞句に期待される主語的な性質は他にも見られないわけではない。

第1に，Шведова (1970, 1980) や Barnetová (1979) によると，通常，連結動詞 *быть* は主格主語名詞句に一致するが，主格述語名詞句と一致することがあるというゆれが見られることが報告されている。

(18) Его спокойствие было/была личина.
his calmness-nom.n. be-pa.n/f. pretense-nom.f.

「彼の平静さは見せかけだった。」

(19) Кабинет был/была большая комната.
office-nom.m. be-pa.m./f. big-nom.f. room-nom.f.

「そのオフィスは大きな部屋だった。」(いずれも Шведова 1970 から。)

これはもちろん述語名詞句が主格の場合に見られる現象であり，述語が造格の場合にはこのような一致のゆれは見られない (Шведова 1980)。

このようなことが生じうると言うことは主格述語に何らかの主語的な性質があると考える理由になる[15]。

また，ロシア語には以下のようなタイプの文が存在することが伝統的に確認されている。

(20) Была весна.
be-pa.f. spring-nom.f.

「春だった。」

このようなタイプの文は「名詞文 (номинативное предложение)」と呼ばれ，

---

[14] この主格付与規則はいわば主格を無標の格と捉えていると考えられる。Babyonyshev (1993) がロシア語において主格は無標の格であるとしていることも示唆的である。

[15] このような現象がかき混ぜによって主語と述語の位置が逆転したものではないことは，2.2.2.1.で示す。ただし，私がインフォーマントによって行った調査ではこのゆれの可能性は確認されなかった。それは一つには私がインフォーマントをお願いした方が現在時制の場合以外では主格述語を事実上認めなかったことが理由である。上述の通り，*быть* は現在形では，少なくとも顕在的には，一切の一致を行わない。

必須項としての主格名詞句とそれに一致した *быть* からなるが，必須項はこれで全てである。何らかの省略，削除が起こっていると考えることはできない。ここでの主格名詞句は，動詞との一致や唯一の必須項であることなどから，形式上はきわめて主語的なものであるが，意味的・機能的な観点から見ると，むしろ述語的であることは上の日本語訳にもあらわれている。名詞文の主格名詞句と，本稿で問題としている *быть* の主格述語名詞句を同一のものであると断言することはできないが[16]，少なくともロシア語において，形式的に主語的な主格名詞句が意味・機能上は述語的な用い方をすることが可能であることは確かである。

次に，形動詞（adjectival participle，причастие）の修飾する名詞の問題がある。形動詞が修飾する主要部名詞（head noun）は通常の動詞であればその論理的な主語になる。

(21) Она любит студента, читающего много книг.
she-nom. loves student-acc. read-adjpart.acc. many books.
「彼女はたくさん本を読む学生が好きだ。」

ここで，動詞 *читать*「読む」から派生した形動詞 *читающего* が修飾してともに名詞句を形成する主要部名詞は *студента*「学生」であるが，これは

---

[16] 例えば，両者は否定の小詞 *не* のあらわれる位置が異なる。

(a) Была не весна.
be-pa.f. not spring-nom.f.
「春ではなかった。」

(b) Лингвистика не есть увлечение.
linguistics-nom. not be-pr. pleasure-nom.
「言語学は遊びではない。」

前者の名詞文では *не* が *быть* の後に，後者の連結動詞文では前に置かれている。さらに，名詞文は存在文と，意味・機能的のみならず形式的にも異なる。

(c) Не было весны.
not be-pa.n. spring-gen.f.
「（例えば，その年はとても寒かったので）春がなかった。」

この場合は，存在文になるが，以下の3点で上の名詞文とは異なっている。(i)小詞 *не* のあらわれる位置，(ii)存在の主体をあらわす名詞句「春」が主格ではなくて生格であらわれ，いわゆる否定生格という現象を示している，(iii)動詞が一致を行わずに中性形であらわれている。

形動詞の論理的主語である。その一方で，*быть* から派生した形動詞は論理的主語と論理的述語の両者を主要部名詞として修飾することができる。

(22) [[бывший врачом] человек]
be-adjpart.nom. doctor-ins. person-nom.

「医師だった人」

(23) [бывший врач]
be-adjpart.nom. doctor-nom.

「かつての医師」

それぞれ，(22)が論理的主語を修飾している場合，(23)が論理的述語を修飾している場合である。この点にも主語と述語が同様に扱われていることが見て取れる[17]。

2.2.2. トピックとフォーカス

上で示した(15)のような主語と述語が姉妹の関係にある構造を想定すると，一つの疑問が生じる。すなわち，このような構造において主語と述語の違いは何なのであろうか。形態的にはどちらも主格という同じ格を付与されているので区別がない。また，統語構造上もどちらも語順以外は同じ位置にあるのでやはり区別がないのである。以下，これら2つの名詞句の関係を探っていく。

---

[17] この様な論理的述語を修飾している形動詞は，辞書には一般に形容詞として登録されているが，これが単なる形容詞ではないことは以下のように副詞的な要素の挿入が可能であることに見て取れる。

(a) Это кабинет бывшего в ту пору председателя.
this office-nom. be-adjpart.gen. in that time chairman-gen.
「これは当時の議長のオフィスだ。」

ただし，このような副詞的な要素が必ずしも可能なわけではなく，より深い調査と研究が必要であるのも事実である。例えば，今回の調査では以下のものは非文との判断を頂戴した。

(b) *бывший в 1945г. председатель
be-adjpart-nom. in year chairman
「1945年当時の議長」

この判断の差が何によって生じるものなのかは今のところ全く不明である。いずれにせよかなりの程度形容詞化が進んでいると考えるべきなのかも知れない。

2.2.2.1. かき混ぜの可能性

以下の現在時制の文を見ていただきたい。

(24)

(a) Высоцкий ϕ хороший певец.
Vysotsky-nom. be-pr. good-nom. singer-nom.

「ヴィソツキーは良い歌手だ。」

(b) Хороший певец ϕ Высоцкий.

「良い歌手はヴィソツキーだ。」

これらはいずれも適格文であり，2つの名詞句が主格を与えられている *быть* の現在時制による文であるが，両者の違いは語順のみ，即ち1つ目の名詞句と2つ目の名詞句の位置が逆転している点のみである。この語順の逆転を説明する分析にはまず2つのものが考えられる。

第一の考え方は，ロシア語の「自由な語順」を説明するために通常用いられる，いわゆる「かき混ぜ」によってこれらの要素は語順が逆転していると考えるものである。

(24′) かき混ぜによる語順の逆転

(a) Высоцкий — хороший певец.

↓ かき混ぜ

(b) Хороший певец — Высоцкий.

もう一つの考え方は，Кохтев и Розенталь (1984) に見られるものである。それは，このような *быть* の現在時制の文における第一の名詞句と第二の名詞句の語順の逆転を，主語と述語の交代，即ち，両者がそれぞれ文の中で占める立場の逆転であるとするものである。

(24″) 主語と述語の交代

(a) [$_{subj.}$ Высоцкий] — [$_{pred.}$ хороший певец].

(b) [$_{subj.}$ Хороший певец] — [$_{pred.}$ Высоцкий].

2つの分析の可能性を探るために，まず現在時制ではなく他の時制の *быть* によるものから考えてみよう。

(25)

(a) Высоцкий был хорошим певцом.
Vysotsky-nom. be-pa. good-ins. singer-ins.

「ヴィソツキーは良い歌手だった。」

(b) Хорошим певцом был Высоцкий.

「良い歌手だったのはヴィソツキーだ。」

この場合，述語名詞句は造格であらわれており，主格の主語と形態上の区別が明示的になされている。従って，語順の逆転はかき混ぜの結果であることが結論付けられよう。しかしながら，現在時制の場合は2つの名詞句の両者ともに主格が与えられているため「どちらが主語でどちらが述語か」はこれを見ただけでは形式上区別することができない。それ故，上述の2つの分析がともに可能なのである。

かき混ぜとはロシア語のいわゆる「自由な語順」を説明するための規則である。Hikita (1992)，匹田 (1993) では，このロシア語におけるかき混ぜの現象を説明するために以下のような規則を提案した[18]。

(26) Chomsky-adjoin any syntactic categories to S.

例えば，以下の文が様々な語順であらわれるのはこの規則を適用したためである。

(27)

(a) Иван читает книгу.
Ivan-nom. read-pre.3.sg. book-acc.

「イワンは本を読んでいる。」

(b) Иван книгу читает.

---

[18] ただし，ロシア語における「自由な語順」がこの規則1つで説明がつくかどうかは問題が残る。それ故，Hikita (1992) ではこの規則をかき混ぜとは呼ばずに，preposing と呼んだ。また，Hikita (1989) ではここで示した左方向への移動の他に，右方向への移動としての postposing も存在する可能性があることを示したが，残念ながらその正確な性質は未だ明らかにはなっていない。

(c) Книгу Иван читает.

(d) Книгу читает Иван.

(e) Читает книгу Иван.

(f) Читает Иван книгу.

つまり，もし上の例文(24)と(25)における語順の逆転がかき混ぜによるものであるとしたら，あらゆる語順がそれぞれ可能であることが予想できる。しかし，この点に関して，現在時制の文とそれ以外のものは異なる性質を示すことがわかる。例えば，下の(c)のような語順の文は現在時制では不可能であるが，その他の時制では可能なのである。

(28)

(a) Ваня есть студент.
Vanja-nom. be-pre. student-nom.

「ワーニャは学生だ。」

(b) Студент есть Ваня.

(c) *Студент Ваня есть.

(29)

(a) Ваня был студентом.
Vaja be-pa.m. student-ins.

「ワーニャは学生だった。」

(b) Студентом был Ваня.

(c) Студентом Ваня был.

これらの差から，過去や未来などのその他の時制のものはかき混ぜによって語順の変異が生まれていると考えられるものの，現在時制においてはその語順の変異はかき混ぜによって生じているものではないと言うことが結論付けられるのである。

2.2.2.2. 主語と述語の交代の可能性

では Кохтев и Розенталь (1984) による第二の分析，即ち，(24 a, b) のような語順の変異は文の中での主語と述語の位置に入る語彙項目が入れ替わっ

ているとする考え方が正しいのであろうか。しかし，この考え方にも問題がある。

(30) *Хороший певец был Высоцким.
good-nom. singer be-pa.m. Vysotsky-ins.

「良い歌手はヴィソツキーだった。」

これは上述の過去時制の文(25)の別のタイプの変種である。(25)では *Высоцкий* が主格であらわれ主語として扱われ，*хорошим певцом* が造格を与えられ述語として機能していたが，それに対して(30)では *хороший певец* が主格を，*Высоцким* が造格を与えられており，(25)と(30)では主語と述語が入れ替わっているわけである。(30)のような文は非文となり，少なくとも現在以外の時制では主語と述語の入れ替えは不可能であることがわかる。

さて，ここで(24)における現在時制での語順の逆転が問題となる。(30)に見たように，過去時制では主語と述語の交代は明らかに不可能である。すると，(24)のような現在時制で見られる語順の逆転現象は主語と述語の交代と見ることは難しくなるだろう。かき混ぜによる説明が不可能な以上，少なくとも(25)や(30)に見られる主語と述語の関係とは異なる関係が(24)の第1名詞句と第2名詞句の間には存在することは間違いない。

では，現在時制における2つの名詞句の間に存在する関係は何なのか。ここでは三上（1960）が日本語について主張しているように，「主述関係」ではなく「題述関係」がロシア語のこの構文でも重要なのではないかという考えを提案する。

つまり，主語と述語という文法的な関係は第2名詞句が造格を与えられる過去時制などでは見られるが，主格を与えられる現在時制では見られない。そこで見られるのはトピックとフォーカスという談話機能的な関係である。そう考えれば，他の時制では談話機能的なトピックやフォーカスと言った要素をかき混ぜによって別個に表現する必要があるのに対して，現在時制では最初から2つの名詞句は談話機能によってのみ区別されているので，2.2.2.1.で見たようにそれにさらにかき混ぜを適用して新たな談話機能を付

加することができないことが説明がつくし，また現在時制では他の時制と2つの名詞句の間にある関係が通常の主述関係とは異なるので本節2.2.2.2.で明らかにしたように第1名詞句と第2名詞句が他の時制の文と異なり交代することも可能であることが説明がつく。

以下の節ではこの2つの名詞句が両者とも主格を与えられている現在時制の文において第1名詞句と第2名詞句の間に見られる関係は主語と述語というものではなくトピックとフォーカスという談話機能的なものであるという考え方にさらなる検討を加えていく。

2.2.2.3. 等位接続構造に見られる性質

現在時制の *быть* による文を他の種類のものと部分的に等位接続させると非常に興味深い非対象性を示し，前節で提案した考え方を支持する根拠を与えてくれる。以下は通常の動詞＋XP と *быть*＋NP を等位接続させた例である。

(31) *Он говорит по-русски, и есть переводчик.
he-nom. speak-pre.3.sg. in Russian and be-pre. interpreter-nom.
「彼はロシア語を話し，通訳である。」

(32) Таня жила в Москве, и была студенткой.
Tanja-nom. live-pa.f. in Moscow-loc. and be-pa.f. student-ins.
「ターニャはモスクワに住んでいて，学生だった。」

これらを見ると一見，*быть*＋NP は現在時制だと通常の動詞＋XP と等位接続が行えないように考えられる。しかし，事実はもう少し複雑である。

(33) Он есть переводчик, и говорит по-русски.
he-nom. be-pr. interpreter-nom. and speak-pre.3.sg. in Russian
「彼は通訳であり，ロシア語を話す。」

(34) Таня была студенткой, и жила в Москве.
Tanja-nom. be-pa.f. student-ins. and live-pa.f. in Moscow-loc.
「ターニャは学生で，モスクワに住んでいた。」

ここでは現在時制の場合も等位接続をすることが可能になっている。つまり，

быть の現在時制＋NP は等位接続の第1要素であれば適格となるが，第2要素であると非文となるわけである。

これと同じ現象は等位接続の相手が他の時制の *быть* を含むものであっても観察される。

(35) *Он был студентом, и есть студент.
he-nom. be-pa.m. student-ins. and be-pr. student-nom.
「彼は学生だったし，学生だ。」

(36) Он есть студент, и был студентом.
he-nom. be-pr. student-nom. and be-pa.m. student-ins.
「彼は学生だし，学生だった。」

ここでも同様に *быть* の現在時制＋NP は等位接続の第1要素であることは認められるが，第2要素になることはできない。

しかし，たとえ第2要素であっても以下のような文は可能である。

(37) Он говорит по-русски, и он есть переводчик.
he-nom. speak-pr.3.sg. in Russian and he-nom. be-pr. interpreter-nom.
「彼はロシア語を話し，通訳である。」

つまり，等位接続の第2要素となってもそこに第1名詞句があれば可能になるわけである。

さらに，ここで注目すべきものは以下の例文である。

(38) Он был студентом, и сейчас ϕ студент.
he-nom. be-pa.m. student-ins. and now be-pr. student-nom.
「彼は学生だったし，現在学生である。」

この例(38)は適格文と考えられるが，これは上で非文と判断された(35)とほぼ同じ内容のものであり，*сейчас*「今」という副詞がトピックとして入り込んでいる点が異なっている。つまり，現在時制の *быть* からなる範疇では「主語」が必要なわけではなく，離れていない位置にトピックが存在することが要求されているだけであることがわかる。そして，それは上の *сейчас* のように名詞句である必要すらない。言い換えれば，前節で述べたように，この場合2

つの名詞句の間にある関係は主語と述語の関係ではなく，トピックとフォーカスの関係であることがここでも見て取れるのである。

このようなかき混ぜによらない，文構造に反映された形でのトピックは他にも見られる。以下の左方転移化（left-dislocated）要素や山崎（1990）が形式題と呼ぶ *это* などがそうである。

(39) Мария - я ее люблю.
Marija-nom. I-nom. she-acc. love-pr.1.sg.

「マリヤは私が愛している。」

(40) Это птицы летят.
this-nom. bird-nom.pl. fly-pr.3.pl.

「鳥が飛んでいるのだ。」

これらはいずれもかき混ぜなどの移動によらず，基底部で生成されたものである[19]。もちろん，これらと本稿で問題としている構文は様々な点で異なる性質を示しており，直ちに同一のものと考えることはできないが，少なくとも，かき混ぜによる「自由な語順」のみがロシア語における談話機能の唯一の表現手段ではないことは確かである。

また，上述の等位接続に関する非対称性が見られるものに *нет* を用いた構造がある。この *нет* はしばしば，否定の極性（polarity）を有する代動詞（proverb）であると考えられることが多いが，匹田（1997）ではこれは代動詞ではなく，アクセントをもてないクリティックである否定の小詞 *не* の独立形であると結論付けた。

(41) —Ваня говорит по-английски? 「ワーニャは英語を話せますか？」

—Ваня нет.
Vanja-nom. not

「ワーニャは話せない。」

---

[19] 紙数の都合からその根拠についてはここでは触れない。詳しくは，匹田（1993, 1996）を参照。

このタイプの文では *нет* が常にフォーカスの機能を果たし，その前にトピックが置かれている。そしてトピックとフォーカスの位置関係に関する要求が等位接続構造において *быть* の現在時制による構文に類似している。

(42) —Вы по-японски читаете? 「あなたは日本語を読めますか？」

(a) — По-японски нет, но говорю.
in Japanese not but speak-pr.1.sg.

「日本語は読めないが，話します。」

(b) —*По-японски говорю, но нет.

「日本語は話すけど，読むのはだめです。」

ここで，(a)では *нет* は等位接続の第1要素となり，その直前にトピック *по-японски* があるので適格文となるが，(b)では第2要素となり，トピック *по-японски* とフォーカス *нет* の間が離れてしまっている。それ故非文となっているわけである。

3．まとめと今後の課題

以上本稿では，ロシア語のいわゆる連結動詞 *быть* の現在形 *ф/есть* が提示する問題を議論した。

第1節では *быть* の形態法を共時的・通事的に概観することによって現在形の特殊性を示し，その特殊性故に現在形が *быть* のパラダイムからはじき出されているのではと言う考えを示した。

第2節は，統語的な観点から *быть* の現在形の持つ特殊性を論じた。ここでは述語名詞句の格付与，かき混ぜによる「自由な語順」の可能性，等位接続構造に見られる奇妙な非対称性などを見ることによって現在形の特殊性は統語的にも際立っており，やはり現在形だけが他の時制・法がなす体系からはじき出されていると考えられることを示すとともに，現在時制におけるいわゆる主格主語と主格述語は他の時制・法の場合と異なり実際には主語と述語の関係にはなく，トピックとフォーカスの関係にあると考えられることを示した。

しかし，問題は残る。現在形が *быть* の体系からはじき出されているのだ

すると，それではそれは一体何なのであろうか（あるいは，何になろうとしているのであろうか）。Timberlake(1993)は現在形 *есть* を particle と呼び，「動詞」と呼ぶことを避けているが，動詞ではないという考えには疑問も残る。というのも，一つには，意味的・論理的な点から考えれば，それは今でも *быть* の現在時制として機能し続けているし（ただし，上述のような未来形が現在の事象を示すような例が一般化すれば話は別である。），それに以下のような例も確認されている。

(43) Он был и есть студент.
he-nom. be-pa.m. and be-pr. student-nom.

「彼は学生だったし，学生だ。」

(44) Он есть и был студентом.
he-nom. be-pr. and be-pa.m. student-ins.

「彼は学生だし，学生だった。」

(45) Он есть и будет студентом.
he be-pr. and be-fu.3.sg. student-ins.

「彼は学生だし，（将来も）学生だろう。」

(46) Он будет и есть студент.
he-nom. be-fu.3.sg. and be-pr. student-nom.

「彼は（将来）学生だし，（現在も）学生だ。」

ここでは *быть* の現在形と他の時制のものが名詞句などを伴わずに，動詞だけで等位接続を行っている。等位接続を行えるものが同じ統語範疇であると考えられるのならば，現在形も他の時制と同様に動詞であると考えるべきであろう[20]。

また，現在形として ϕ と *есть* の2つの形式が認められているが，これらの間にはどのような違いがあるのであろうか。様々な文献で非常にしばしば，両者の間には文体的な差があることが指摘されている。また，今回行った調

[20] ちなみに，この場合見られる述語の格であるが，述語名詞句が隣接している動詞の時制によって決まっているようである。よって，過去形と未来形に述語名詞句

査でもインフォーマントをお願いした方からその点を指摘された。しかし，それ以外の文法的な違いはないのであろうか。現在のところ，調査の中で ϕ と *есть* の交代によって文の文法性や論理的な解釈に影響を与えるような例は未だ確認されていないが，今後はこの点についての確認をより徹底的に行う必要があると思われる。

この様な残された問題を解決し，連結動詞としての *быть* の全体像を解明するために，より一層の調査と考察を行う必要があるのは言うまでもない。

参考文献

Виноградов, В.В. (1960) *Грамматика русского языка,* т. 2-1, Издательство Академии наук СССР.

Иванов, В.В. (1983) *Историческая грамматика русского языка,* Просвещение.

Иомдин, Л.Л. (1990) *Автоматическая обработка текста на естественном языке: модель соглосования,* Наука.

Ковалевская, Е.Г. (1992) *История русского литературного языка,* Просвещение.

Кохтев, Н.Н. и Д.Э. Розенталь (1984) *Популярная стилистика русского языка,* Русский язык.

Шведова, Н.Ю. и др. ред. (1970) *Грамматика современного русского литературного языка,* Наука.

が隣接している(44)と(45)では造格が，現在形と隣接している(43)と(46)では主格が与えられている。さらに，その規則に従っていない以下の例は非文となる。

(a) *Он есть и был студент.
he-nom. be-pr. and be-pa.m. student-nom.

(b) *Он был и есть студентом.
be-pa. be-pr. student-ins.

(c) *Он есть и будет студент.
be-pr. be-fu.3.sg. student-nom.

(d) *Он будет и есть студентом.
be-fu.3.sg. be-pr. student-ins.

——, (1980) *Русская грамматика,* т. 2, Наука.

Babby, L.H. (1980) *Existential Sentences and Negation in Russian,* Karoma.

——, (1986) "The Locus of Case Assignment and the Direction of Percolation: Case Theory and Russian", in R.D. Brecht and J.S. Levine eds. *Case in Slavic*, Slavica.

Babyonyshev, M. (1993) "The Acquisition of Russian Case", in C. Philips ed. *Papers on Case and AgreementII,* MIT Working Papers in Linguistics, vol. 19.

Barnetová, et al. (1979) *Русская грамматика,* Academia.

Chvany, C.V. (1975) *On the Syntax of BE-Sentences in Russian,* Slavica.

Comrie, B., G. Stone, M. Polinsky (1996) *The Russian Language in the 20th Century,* Oxford.

Hikita, Go (1989) *Some Formal Aspects of Russian Word Order,* M.A. Thesis, Hokkaido University.

——, (1992) "Extraposition of Elements Out of Some Syntactic Categories in Russian", *Gengo Kenkyu,* 102.

Timberlake, A. (1993) "Russian", in B. Comrie and G.G. Corbett (eds.) *The Slavonic Languages,* Routledge.

佐々木秀夫 (1982)『ロシヤ古文典』, ナウカ。

匹田剛 (1993)「ロシア語における2つの統語的トピックについて」,『人文研究』第86輯, 小樽商科大学。

——, (1994)「連結動詞 *быть* の主格述語名詞句についての覚え書き」, *Language Studies* 第2号, 小樽商科大学言語センター。

——, (1995)「ロシア語における主語・動詞の一致と主格の付与をめぐって」,『人文研究』第89輯, 小樽商科大学。

——, (1996)「ロシア語における連結動詞と主格名詞句を先導する это をめぐって」,『人文研究』第91輯, 小樽商科大学。

——，(1997)「ロシア語のнетを用いた構文について」,『人文研究』第93輯，小樽商科大学。

——，(1998)「ロシア語の主格名詞句をめぐって」，『人文研究』第95輯，小樽商科大学。

三上章（1960）『象は鼻が長い』，くろしお出版。

山崎紀美子（1990）『ロシア語の構文』，くろしお出版。